

ゲルマン都市の先驅的諸形態

増田四郎

ゲルマン民族の居住形態に關し、タキトゥスは、その『ゲルマーニア』の第十六章で、「ゲルマニびとどもに、一も都市 (Civitas) に住むものなきは、よくひとの知るところ、彼等は、泉や野や森に、こゝろ惹かるゝにまかせ、ちりちりに相分れて住居をなす」と述べ、紀元後一世紀末葉のゲルマン諸族にとつては、少くとも羅馬風に解された都市的聚落は、いはゞ全く未知のものであつたことの雄辯な證言を供してゐる。然るに、それより一千餘年を経た十二・三世紀に至れば、獨逸民族の領有するあの宏大な中歐の天地は、たちまちにしてその景觀を一變せられ、つひにはビュヒアーもいふ如く、その「西南部地方では平均二乃至二・五平方哩毎に一都市を、中部及び西北部にあつては三乃至四平方哩、東部地方では五乃至八平方哩毎に一都市をもつ」といふ熾んな趨勢をしめし、獨特の團體構成といはゆる「都市經濟」の積極的形成は、彼等の生活様式の裡に、まさに「都市と農村」(Stadt und Land)といふ蔽ふべからざる二元性を、はつきり自覺の形をとつて浮びあがらせたものと考へられる。一體かうした驚くべき重大な變化

は、如何にして、また何故に齎らされたのであらうか。この廣範な疑問を發する前に、吾々は當面の課題として、中世ゲルマン諸都市の起源をたづねなければならぬ。

想ふに、中世都市の起源に關する問題が、前世紀の中葉以來、主として法制史的に、ついで經濟史的にとりあげられ、また近時に至つては政治史・地方市史・歴史地理學・移住形態學等の諸成果をも加味して愈々複雑となり、それから個別研究に基く新しき綜合への論議がつゞけられつゝあることは、すでに周知の事實である。そしてその結果、綜合的考察の焦點が、専ら中世都市がそれとしてあらゆる諸條件を具備するに至つた十二・三世紀に向けられてゐることも、否定出來ぬ傾向であるが、それと同時に、これら諸條件の各々の發生過程に關するより、舊き時代への探究が決して等閑視さるべきでないことは、今更いふまでもなからう。オットーの特許狀が、いはゆる市場的移住 (Markansiedelungen) の意義が、防備施設の起源が、また或ひはギルド制の誕生が、それぞれかうした昂めらるべき綜合との關聯に於て、更に徹底的な再吟味を要請する所以である。かくの如く、都市を構成する諸要素の發生展開自體が、既にあらゆる角度より考證さるべきである以上、これらを安易に總括して「都市の起源」を云々することは、吾々にとつては却つて、徒らに問題の流出と放出に終始するの危険を伴ふものといはなければならぬ。従つて、こゝでは更に觀察の視野を聚落形態の側面に限定し、いはゞゲルマン諸都市の歴史地理學的な原型乃至は先驅的形態ともいふべきものについて、極めてプロヴィゾリーリッシュな企てながら、一聯の概觀圖をものしてみたいと思ふ。

さて、通説の教ふところによれば、そうした都市の原型として、キヴィタス (Civitas) 及びブルグ (Burg) の名によつて呼ばれる二つの形態が、代表的にとりあげられる。そしてキヴィタスとは、一般的にいひつて、ライン、ドー

ナウ兩河の線に沿つた古き羅馬人建設の諸都市、乃至はその後基督教の傳播に伴ふそれら諸都市を基體とせる西南獨逸の司教都市の謂であり、ブルグとは、北歐の全土に散在せるゲルマン諸族に固有な防備的性格を本位とする聚落形成、即ち「城砦」を中心とせる古來の生活様式であつたと一應概括され得るが如くである。しかし、このことは未だ問題の解決にはなつてゐない。何となれば、西南獨逸のあの古きキヴィタスが、これと接觸するゲルマン諸族に對して、都市的文化の新要素を注ぎ込んだであらうことは想像に難くないが、しかし民族大移動のかた、キヴィタス自體の變遷に非常な消長がみられ、のみならずこの語の内容が、*vitas, castellum, oppidum, vicius* 等諸語の用例と並んで、複雑多彩な推移を示したことも事實であり、ましてや、奥地に散在せりといはるゝブルグは、果して如何にして都市的聚落への重要な契機源泉となり得たのであらうか。キヴィタスやブルグの變遷を、規模の上から、法制の上から、或ひは機能の上から、何らかの意味で内容的に理解するところなくしては、都市發生の姿を偲び、ひろく歴史の連續を證することゝはならないであらう。それ故、例へば都市の起因として、羅馬時代の市制、教會及び修道院等聖界の諸施設、主宮・城砦の存在、メッセの開設等々を列擧することが、教本的には無難な立論として首肯されようとも、その限りでは何ら吾々の問題解明には資し得ないのであり、またかのゲルマン上世または初期中世に於ける流通經濟的要素を強調する論者の多くが、紀元二世紀のプトレマエウスの地圖にみえるゲルマニアの九十三箇所のポレイス (*polis*) を擧げ、或ひは十世紀アラビアの旅行家アル・マスディの記録にみえるフランク王國なる百五十の都邑の存在等を例證して、いはゆる都市的大聚落形態の豫想外に多きを主張しようとも、⁽³⁾ 程度の差こそあれ、それらは飽くまでも漠然たる傍證の集積に過ぎぬのであつて、畫像としてのゲルマン初期中世の實情を彷彿せしむるには、未

だほど遠い企てといはなければならない。

かくして吾々は、一應通説の所論から脱却することによつて、更に具體的な都市原型への探索を試みるべき新しき立場に到達するのであるが、この際吾々にとつて最も有力な手がかりとなるものは、前掲諸種補助學の成果に加へて、最近頃に活潑となれる考古學・地名學等の貴重な實地踏査の報告書の類がある。いまこれら諸研究の動向を考慮しつゝ吾々の腦裡に浮び來るあの雜然たるゲルマン都市の始源的諸形態を、能ふ限りに整理し統合せんに、結局ほど次の如き三者を、その最も代表的且つ根源的なタイプとして擧げ得るが如くに思はれる。即ちその第一は、ゲルマン的・防備的性格に彩られた前述せる「ブルグ」であり、第二は、最近特に重視されはじめたゲルマン的・商業交易の中心「ヴィク」(Vik)と呼ばれる、移住形態であり、そしてその第三は、羅馬的傳統に根ざす宗教的・文化的乃至は經濟的中核たる廣義の「キヴィタス」である。これら三者が、各々固有の機能を擔ふ特異な聚落形成であつたことは、ここに吾々が大膽に圖式化せる如くであるが、事實は決してしかく單純明白なものではない。そこには極めて錯綜した史料上用語例の混淆と、移住様式自體の變遷交流が認められるのであるが、それらは果して具體的には如何なる規模のものであり、また如何なる過程を経て、「中世都市」といふあの比較的共通な特色を具備するに至つたのであらうか。カエサル、タキトゥスの古き時代は姑く措き、考察の限界をほどフランク王國の盛時以降、十一世紀末に及ぶいはゆるヴィキング時代に區切り、以下吾々は、この代表的にとりあげられた三形態の各々について、いはゞ通説の域を幾分にも越えた一つの試論を企圖してみたいと考へる。

(2) 例へばヘルムスト・ノムスの近著『Die deutsche Stadt im Mittelalter Stuttgart 1935』の第一章『獨逸都市の發展』の叙述の如きを参照せよ。

(3) からした方法を中心とする實情描寫への最もすぐれた努力の事例として吾々は巨匠ドーブナー教授の諸著を擧げ得る。殊にその主著『Grundlagen, 2. Aufl. Teil I. S. 114—116, Teil II. S. 363 ff, 419 ff.; Karolingerzeit, 2. Aufl. Teil II. S. 117—124 等の行論を見よ。

(4) 拙稿『中世都市』(『社會經濟史學』第十卷第十一・十二號所收) 参照。

II

いま極めて概括的に、即ちその規模・構造並びに機能等の相違を度外視して、吾々が掲げた第一の始源的形態たる「ブルグ」(Burg, pincz, borg, boroug)に關し、その共通せる特色をいへば、それはまづ、出來得る限り自然の地形・地質等を利用し、何らかの意味で防備をほどこせる一定の場所であつたと定義づけるのほかはない。そしてこの定義は、一見全く無意味の如くであるが、實はそこにはゲルマン的ブルグの本領を、飽くまでも「防備」(Befestigung)施設そのものに置き、「防備ある居住地」(befestigter Wohnort)であつたことを、いはゞ二義的なものとして理解せんとする意圖が含まれてゐる。換言せば、吾々の出發點をなすゲルマン古來のブルグは、決して後世にみる如き一つの居住乃至は聚落形態を指したのではなく、寧ろ單なる施設であり、その施設が聚落形成と結びつくことによつて、古ゲルマン的な生活または社會の在り方を示唆する獨特の機能を發揮し得たのであると考へる。然らばかくの

如く、もともと居住様式にあらざる古きブルグから、聚落形態としての最高度の様相を示す社會的形成體「都市」即ち *Burgstade* の完成は、如何にして齎らされたのであらうか。ひとしくブルグと呼稱さるゝ以上、この兩者をつなぐ長き系列上には、幾多の中間的な段階と變質とがみられなければならない。以下かうしたブルグの諸形態を、その構造乃至は規模の上から、機能或ひは成立年代の側から、順次にとりあげることによつて、都市成立までの變遷の大概をあとづけてみよう。

(一) フォルクスブルグ (*Volkshurg*) タキトゥスの『羅馬編年史』(I, 60; II, 62, etc.) をはじめ、既に古典古代の記述史料に間々散見するものにして、歴史時代に入つてよりのブルグとしては、恐らく最古の形態を示すものと考えられる。その特色としては、(イ) 自然の高地・丘陵・河川等を利用した極めて大規模にして廣大な城砦であること、(ロ) ブルグ内部には平時に於ける恒常的居住の設備なく、瞭かに一朝有事に際しての避難防禦の據所 (*Einburgrig*) であつたこと、(ハ) ブルグ山麓には必ず防備なき開放的な幾つかの聚落をもち、そこには屢々領主乃至は豪族・貴族の邸第を伴ふこと、従つて (ニ) この種のブルグは、常に武器とる貴族及び一部兵士達の要塞たるのみならず、同時に近郷一帯の部落民全體を收容する民衆の避難所 (*Ganburig*) であつたこと等が數へられよう。そしてこの最後の特色こそ、まさにフォルクスブルグの最も本質的な性格であり、*Flechburig*, *Ganburig* 等の別名と共に、古ゲルマン諸族の一般的生活様式を物語る貴重な遺制といはなければならぬ。かくの如きフォルクスブルグの具體的な大いさと規模とについては、地形及び聚落の大小廣狭に應じ、また防備の必要程度に應じて、種々雑多な形態——圓形・楕圓形・方形等——と築城の技術が施されたであらうことは勿論であるが、いまその代表的な一例として、か

のゲルマニクスの遠征で名高き Niedenstein-Mattum の Alkenburg を見るに、それはほとゞ五四〇米に三三〇米位の矩形をなす美しき臺地を、大部分は石壁、一部分は土壘もて圍繞せる城砦であり、ブルグの一面の如きは、實に五重の壘壁を残してゐる。尙ほこのほか、あの有名な激戦の地トイトブルグの遺跡にみる地形とそこに残存する百米餘の築壘の一部を想ひ、ザックセン各地にのこる諸城砦、就中一料に半料といふ壯大なディーメル河畔マルスベルグの規模を考へ、また Gau Dersia には Dersburg, pagus Ostorpurg には Osterburg, pagus Hildbeil にはあの宏大な Lübecke 近傍の Volksburg といふ如く、地名學的研究と發掘とが證明する Gau (pagus) に結合した多數ブルグの存在を想はゞ、いはゆるフォルクスブルグなるものゝ大體の構造が想像されるであらう。⁽⁶⁾ 古ゲルマン的社會機構を前提して、はじめて理解されるフォルクスブルグは、民族大移動、部族國家の形成、フランク王國の興隆といふあわただしき政治・法制的變動を経て、漸くその機能を失ふに至り、古き様式を形としてそのまま遺しながらも、時代は既にそれと並んで新しきブルグの出現を要求しつゝあつたわけである。⁽⁷⁾

(二) ヘルレンブルグ(Herrenburg) フォルクスブルグが住民全體の協同的防備をめざす廣大な施設なるに反し、一部聖俗兩界諸侯貴族の邸宅・館第・其他の建造物を中心に形成された小規模なブルグを總稱して、ヘルレンブルグと名づける。従つてこゝに於ては、ブルグは既に單なる施設の域を脱し、平時恒常的な居住の場所となつてゐることに注意しなければならない。この變化は如何にして生じたのであらうか。それは前述せる如き政治的變革に基因するところ最も大であるが、具體的には古くよりフォルクスブルグの山麓にあつたあの貴族・領主等の邸宅(Herzshof)が、特にカロリング王朝時代に入つてより、行政區劃の整備、小部族對立の解消等々に伴ひ、主として政治經濟的な

配慮に基き、漸次防備施設もて固められると共に (befestigter Herren- und Wirtschaftshof)、他方強力なカール大帝の集權下、各地に置かれた王宮 (Platz)、御料地經營の中心、幹線交易路の要衝 (例へばいはゆる Halweg に沿ふブルグを想へ)、教會及び修道院等々が、主として羅馬的影響をうけた方形の防備を施され、兩々相俟つて、こゝに文字通り、諸多支配階級を本位とするヘルレンブルグ形成の多様な素地が築かれたのである。そしてかうした新施設の多くは、自然發生的な理由は固より、政策的な意味よりしても、概ね舊きフォルクスブルグに近接して造築されたのであるが、しかしその構造は、未だ家宅の防備たる性格強く、相當數の家臣従士と恒久的な兵備を包含するいはゆる Dynastenburg と呼ばれるには、尙ほ幾分の距りがあつた。然るにその後、ほゞ九世紀の後半に於ける北方ノルマン民族の侵入、わけても十世紀以降にみる東方ハンガリー族の相次ぐ掠奪を最大の契機として、もはや敍上の如き小規模な防備をもつては、到底強力な外敵に抗し得なくなり、封建制度の進展てふ一般的動向を加へて、こゝにより大規模な居住地防備への急速の展開が齎らされた。かくて一方では、前述 Dynastenburg の完成並びに更に擴大された都市的聚落の防備といふ意義深き第一歩が踏みいだされると同時に、他方では、いはゆる Schloss (castellum, castle) 及び後述 Grenzschutzburg, Festung, Schanze, 等と呼ぶ多種多様なブルグ的諸形態の成立が約されたわけである。^(ca)この故に、十・十一世紀は、まさしくヘルレンブルグの完成期であると共に、都市ブルグ即ち Burgstätte への興味ある過渡期であり、多端な内外諸情勢を反映した城砦構築の黄金時代であつたと考へられる。事情概ねかくの如きを以つて、ひとしくヘルレンブルグの名もて呼ばれるものも、専ら軍事的なブルグより、政治・行政の中心乃至は Klosterburg の如きに至るまで、或ひはまた、羅馬的な方形のブルグより、東部ザックセン即ちヴェーゼル・エルベ間に

早くより存在した直經約六、七〇米の圓形をなすゲルマン的伯職所在地のブルグ、即ち Grafenburg (Rundlinge)⁽⁹⁾に至るまで、その内容、規模、様式等は極めて雑多であり、これを一律に論ずることは殆んど不可能といふべきであらう。そしてこの多様性こそ、まさにハインリッヒ一世以下ザクセン諸帝によるあの夥しきブルグ建設の内容的複雑性を物語るものといはなければならない。即ちハインリッヒ一世より、オットー諸帝を経てハインリッヒ二世に至る五代一世紀、この間エルベ以西の獨逸に建設されたブルグの數は、ケルンテン、オストマルクの十一を除いて、合計百五十八を數へ得るが、敘上の如きブルグ自體の多様性を想ひ、またいはゆる「建設」なるものゝ眞意を汲めば、これを以つて直ちに後世にみる如き「都市」の建設と見做すことの極めて危険なる所以と、しかも尙ほ、都市防備史上に占めるこの史實の否むべからざる重要性とが、ほど適確に首肯推測され得るであらう。

(三) シュッツブルグ (Schutzburg) 國王はじめ諸侯貴族が、専ら領内警備と治安維持を目的として、或ひは邊疆に (Grenzschutzburg)、或ひは商業交易の要衝に、手兵を常置駐屯せしめた比較的小規模な城砦の總稱である。この故にシュッツブルグ興亡の跡とその分布は、一方國境乃至は領邦觀念の變遷を示唆すると同時に、他方市場交易の盛衰を物語る好個の史料であると考へられる⁽¹⁰⁾。かうしたブルグの實例は一々枚擧に遑ないが、いまその一例として、九世紀初頭以來スラヴ諸族の、ついでゲルマン民族のはげしい爭奪の的となつたオーデル支流ワルテ河畔のツァントツホ (Zantoch) をみるに、このブルグはあたかもトロヤや北歐ハイタプの遺跡の如く、實に上下十二の段層より成つてゐる。そしてその最下層即ち第一ブルグは、十世紀後半まで存続したと想定されるが、發掘による規模は、わづかにワルテ河を北邊とする直經約五〇米の半圓形であり、後世の相重なる壘壁跡より推しても、ブルグを取まく統一ある

一區劃の地積は、まづ東西四〇〇米、南北三〇〇米足らずの楕圓形地區であつたに過ぎない。この地區全體が、おそらくそのまゝ、更に古き時代に於けるフォルクスブルグであつたであらうといふシュッフハルトの推定は兎も角、吾吾としては、河をへだてゝ居城 *Schlössberg* と相對し、周圍にめぼしい聚落遺跡をも伴はぬツァントツホ發掘の情況を通じて、いはゞ純然たるシュツツブルグの様姿を偲ぶことが出來よう。¹²

(四) テムペルブルグ (*Tempelburg*) スラヴ諸族の間に形成された神殿中心の特異なブルグの一種である。従つてゲルマン都市には直接關係はないが、ヴィキングアの交易と密接な交渉をもち、また基督教徒、就中獨逸人による北歐への關心にすくなからぬ役割を演じたが故に、こゝに簡單に一言して置きたい。¹³ 想ふに九世紀乃至十一世紀は、スラヴ民族活動の一種の盛時であつたが、その頃西スラヴ諸族の間には、いはゞ一種の *Prigjestant* を中心とする廣大な祭祀同盟が齎らされた。その中心が即ちフェルドベルグ近傍の「北歐のデルフィ」レトラ (*Letra*) のテムペルであり、また其後大陸基督教化に伴ふ異教徒最後の據點、バルト海上リューゲン島に形成された聖城アルコナ (*Arkona*) のブルグである。海洋に面した臺地を選び、一邊約二〇米の正方形の神殿を中心に、壘壁もて圍まれたわづかに二五〇米に一二〇米 (レトラ)、乃至は一八〇米に一三〇米 (アルコナ) といふ比較的小規模なブルグが、何故かくも重要な聖地と仰がれたのであらうか。¹⁴ 否、それよりも、あの民衆生活に根ざした大きなフォルクスブルグをもつゲルマン諸族の間に、何故かうしたテムペルブルグの發達をみなかつたのであらうか。¹⁵ 興味ある問題の所在を想ひながら、その説明はすべて他日に期したいと思ふ。

以上吾々は、ブルグの代表的な諸形態を概観した。しかしそれは飽くまでも類型的な考察であり、事實の多くは、

寧ろかうした諸形態の混成的なものであつたことはいふまでもない。しかし、何れにせよ、それらは未だ「都市」ではなく、ブルグの本領たる「防備」的精神の種々なる表現に過ぎなかつた。然るにその後十二世紀に入るや、商業的移住の刮目すべき盛行は、やがて「ブルグ」を「市場」と等置して觀念することとなり、こゝにはゆる Burgstädte のめざましき展開を招來する。しかしそれに言及する前に、吾々は第二の始源的形態、「ヴィク」について考察しなければならぬ。

(9) キヴィタヌとの比較に於て、古ゲルマン諸族にみるブルグ研究の必要を示唆したシーグフリート・リーチホルのあとをたどつて (S. Rietschel : Die Civitas auf deutschen Boden bis zum Ansrange der Karolingerzeit Leipzig 1894. S. 95—102) 主として記述史料に基く幾多の企て——例へば W. Gerlach : Die Entstehungszeit der Stadtbefestigungen in Deutschland. Leipzig 1913. の如き——が現はれたのであるが、これらとは全く別個に、専ら考古學的發掘を根據とすることにより、ブルグ研究にまさに劃期的な新生面を開いたのは、あのすぐれた考古學者カール・シュエッフハルトの諸研究である。その方法の優越と視野の廣大の故に、彼の論著は常に先史學のみならず、また特に初期中世史の解明に資するところ、まことに大なるものが存する。以下吾々の考察も、その諸著に負ふところ少くないが、こゝではさしあたり次の二主著を擧げて置かう。C. Schuchardt : Vorgeschichte von Deutschland. 4 Aufl. München u. Berlin 1939. ; Altenröpp, Kulturen-Rassen-Völker. 3. Aufl. Berlin u. Leipzig 1935. 尙ほ彼のトルターと關する古き研究に Hof, Burg und Stadt bei Germanen und Griechen. N. Jb. f. klass. Alt. 1907. 249p. 。

(9) C. Schuchardt : Art. "Burg" in J. Hoops Reallexikon der germ. Altertumskunde, Bd. I, S. 353 ; Derselbe : Vorgeschichte v. Deutschland S. 164, 260 f., 333 f. 尙ほ先史時代たるの遺跡・遺物の概要に關しは C. Schuchardt : Deutsche Vor- und Frühgeschichte in Bildern. München u. Berlin 1936. を見よ。

- (7) このことは決してノルクヌブルグの消滅を意味するものではない。その或るものは既にメロヴィング王朝時代よりブルグを何らかの據點として、都市的聚落に發展してゐたものもあつた。例へば Winzburg, Hammelburg 等がそれである。(Hoops: Reallexikon, Bd. I, S. 353. 参照)
- (8) W. Gerlach: Die Entstehungszeit der Stadtbefestigungen in Deutschland S. 31—39; C. Schnelhardt: Vorgeschichte, S. 314 f.; J. Hoops: Reallexikon, Bd. I, Art. "Burg", 等参照。
- (9) C. Schnelhardt: Vorgeschichte, S. 310 f.; A. Dopsch: Grundlagen, Teil II, S. 374, 等参照。
- (10) P. Hellwig: Deutsches Städtewesen zur Zeit der Ottonen Ostrowo 1873, S. 17. 尤もクルウツキは本書に於てブルグをさすべし都市と解する誤謬を認むべき。
- (11) A. Dopsch: Grundlagen, Teil II, S. 364 f.
- (12) A. Brackmann u. W. Unverzagt (Hrsg. v.): Zantoch, Eine Burg im deutschen Osten, Teil I, Leipzig 1936, は一九三二—三三年に於ける發掘事業の最も詳細な報告書である。第一ブルグに關しては特にその S. 6 f., 128 ff. 及び附圖第一及び第二圖を見よ。尙ほ C. Schnelhardt: Vorgeschichte, S. 376, 参照。
- (13) テイトマール・フォン・メルセルグ、マダム・フォン・ブローメム等の著作を想く。
- (14) シェットホルトによる發掘調査の諸報告は、その著 Arkona-Rethra-Vineta, Ortsuntersuchungen und Ausgrabungen 2. Aufl. Berlin 1928, に掲載されてゐる。殊にその S. 18 f., 21, 51, 56, 等の見取圖を見よ。
- (15) エルンスト・ワグネルの著 Jan de Vries: Altgermanische Religionsgeschichte, Bd. I, Berlin und Leipzig 1935, S. 265—272, 参照。

三

「ヴィク」(Wik, wick, weig, wich, wig, vic, wyk)なる語尾をもつ多数地名の存在と、中世紀の南獨逸に於て *markrecht* と呼ばれた都市法 (*Stadtrecht, jus civile*) が、北獨逸では多く *Welchbild, wibeld* と稱せられた事實に鑑み、或ひはまた、ヴィキングアー (*Wikingar, viking*)なる語の起源に關聯して、「ヴィク」一般が特殊の研究対象として注目されたのは、既に前世紀の末葉であつた。⁽¹⁶⁾ それ以後、これに關説せる多くの諸研究をみたが、それらは専ら都市法を繞る法制史的論作か、さもなくば單に語原史的にこの問題をとりあげたに過ぎず、移住形態の問題としての「ヴィク」探究に志したものは、寡聞にして吾々の接し得なかつたところである。然るに最近あたかも時を同じふして、二つのすぐれたヴィク研究の成果が發表せられた。一はワルター・フォーゲルによる極めて示唆に富む全北歐の総合的考證であり、⁽¹⁷⁾ 他はヘルバート・ルダトによる東獨逸の地名學的研究である。⁽¹⁸⁾ 双方とも未だ試論的色彩の濃厚なものではあるが、新分野の開拓を示す斬新貴重⁽¹⁹⁾の文献といふべく、従つて以下主としてこの兩者、わけてもフォーゲルの所論に準據しつゝ、吾々の考察をおしすゝめてみよう。

さて、フォーゲルの蒐集によれば、*Wick*なる語尾をもつ移住名乃至地名の分布は、スカンヂナヴィアの全土は勿論、丁林・和蘭・白耳義・英吉利の全土、北獨逸の大部分、並びに北佛蘭西の一部に及び、スカンヂナヴィアを除外しても、その數實に八〇〇以上に達し、内約三分の二の五五〇が英吉利に、残り二五〇餘が大陸側に散在してゐたことが立證されると⁽²⁰⁾ *Erlorwic (=York)*, *Norwich*, *Trundarwic (=London)*, *Quentovic*, *Osterwic*, *Braunsch-*

weig, Bardowik, Schlawwig 等々、中世北歐商業史上顯著な地名の事例に徴しても、吾々はその重要性の一端を窺ひ得るであらう。然らば一體「ヴィク」とは何を意味し、また如何なる移住形態を指したのであらうか。

まづ語原史的に検討された通説をみるに、(一)この語を以つて羅甸語 *vicus* (即ち防備なき場所) より導き出された轉語となす説、(二)入江・港灣または一般に沿岸河川の後退分岐せる場所を意味するスカンヂナヴィアの共通語 *Vik* || *Bucht* より來れりとの北方起源説、及び同じくゲルマン起源説ではあるが、(三)低地獨逸語の *Wikan* || *weichen, zurückweichen* 等と同系の語原に發し、あたかもブルグにみた如き生命財産等を護る避難所乃至は *Nebendorf, Hintendorf* とみる説等が、最も代表的なものとして擧げられる。⁽²⁾しかしこれらの通説は、夫々(一)少くも十二世紀以前に於ては、佛蘭西の一部を除き、他のヴィク地名は概ね羅甸文化の浸潤よりも舊く、または無關係或ひは對照的に史料に現はれること、(二)スカンヂナヴィアには、成程港灣關係のものが絶對的に多數であるが、それらは寧ろ後世の新しい成立であり、従つてこゝからヴィク一般の本質を抽出することは不可能であると共に、内陸に散在する多數ヴィクの解明には資し難いこと、及び(三)語原は兎も角、初期中世の具體的史實に照し合せて、これを單なる *Nebendorf, Hintendorf* と見做すには、餘りにヴィク地名の活動が積極的意義をもつてゐたこと等といふ有力な反駁的諸事由の故に、必ずしも正鵠を得たものとはいひ難いのであり、フォーゲルの鋭利な分析と類推が、全く別個の着眼點より行はれる所以である。

即ちフォーゲルは、まづ英吉利に於けるあの夥しきヴィク地名の過半数が、*Brighthelmich, Elswick, Osborwick, Ullingwick, Willmotswyk* 等の如く、不思議にもアングロサクソン系の人名と結合し、また残りの大多數が、*Bot-*

vick (=pero-wic=barley-wik), Cheso-wic, Hardvick (=hard-wik), Oxen-wic, Sall-wic, 等の如く、家畜・物産・穀物名と結びつく事實より、この結合の仕方に、いはゞヴィクの原初的な在り方を想定し、他方七世紀より十一世紀に至る五百年間、ヴィク地名の或るものゝあの驚くべき流通経済的・積極的活動の史實に照し、またロンドン、ウインチェスター、クェントヴィック、プレーメン、シュターデ、ミンデン等の古文書に窺はれる Wichmann, Wigrove, Wigorefa, Wikvogt 等ヴィク關係の法制史的諸多用語例を分析し、語原的にはアングロサクソン乃至は低地獨逸語の wiken への關聯を承認しつゝ、「ヴィク」の本質は、決して上述せる如き通説の所論にあるのではなく、寧ろ地主及び莊園領主が領内一定の場所に設けた餘剩物資の貯藏場、または當時北歐を通じて支配的なりし Wanderkauflente の商品貯藏場の所在地、ひいてはいはゆる遠隔地商人のつどひ來る諸多物資の集散地にほかならなかつたことを詳論する⁽²⁾。

かうしてその發生の當初より、交易的性格を烙印づけられたヴィクの或るものは、九世紀末以降愈々防備なき都市的大聚落、即ち羅甸的表現もていへばエムポリウムへの代表的萌芽形態となり、いはゆる「都市なき」初期中世の全北歐に、實質的な商業中心を形成したのであるが、その名稱の變遷を觀るに、和蘭南部及び英吉利の特に遠隔地商業に繁榮せる一部は、やがて新たに「Port」の名が冠せられ、ついで十二世紀以降商業的・市場的移住の勃興と共に、前述 Borouin なる一般的呼稱に合流した。然るにこれに反し、獨逸本國に於てはかゝる名稱の變化なく、總じてそのまゝに存続し、たゞ新領東獨逸に於てのみは、獨逸人による新設ブルグの近傍に残された既存スラヴ族の古き市場的移住地區を指す一般的名稱として、ヴィクなる語が新規に傳播し、十二世紀に入つてブルグ市場都市となりゆ

くに従ひ漸次兩者の合體となり、こゝにヴィク本來の意義が、全北歐を通じて失はれたものと考へられる⁽²³⁾。この故にフォーゲルは、七世紀乃至十一世紀を以つて、北歐史上の「ヴィク時代」(Vik-Zeit)と唱へ、ヴィク相互間の交易流通を擔つて、全北歐をよく南歐地中海文化圏に結びつけたいはゆる遠隔地商人(Ferihändler)の重要性を強調すると共に、それに關聯して、あの永き論争の課題、「ヴィキング」の語原に言及するわけである。

抑々ヴィキングの語原については、Vik || Bucht なる前掲通説に準據し、港灣に何らかの關係あるものと解することに一應の合致がみられたが、港灣に上陸して掠奪を行ふものと解すべきか、港灣附近に待伏せして航行の船舶を襲ふものと解すべきか等々の、微細の見解につきては決して統一なく、のみならず港灣並びに掠奪説一般の根據が、ヴィキングの平和的・文化史的性格の強調と共に漸く動搖を來し、最近に至つては、文献學的考證を経て、ゲルマン部族名の一種とみる諸説、或ひは瑞典人によつて住まはれた Runo 島に於ける海豹を意味する方言、“wikan”より轉訛して「海豹を捕へる人達」を稱したとみる説まで生じ、ヴィキングの語原問題は、まさにその歸着するところを測り得ぬ有様である⁽²⁴⁾。然るに敘上の如きフォーゲルの新研究は、勢ひこの論争にも亦、一つの大きな解明の曙光を齎らす結果となり、こゝにヴィキングを以つて、その本來の意味は、前述せる如き「ヴィクに住まふ人達」の謂であるが、後轉じて一定の目的、恐らくは平和的な、従つてまた多くは商業交易のために「ヴィクを訪れる人達」の謂にも用ひられ、更に三轉して、平和的交易が諸多の事情により寇奪的性格を帯びても、尙ほこの語が廣義乃至は本來の意味を離れて殘存したといふ注目すべき新説が提唱されたわけである⁽²⁵⁾。その引證史料は必ずしも充分とはいへぬが、ヴィク研究の當然の歸結として、一應首肯さるべき見解であらう。

以上吾々は、専らフォーゲルの所説に従つて、「ヴィク」の大様を概説した。しかし研究方法の特殊性と参考資料の不足は、到底考古學的發掘の如き具體性を望み得ないのであり、それだけ吾々にとつて、ヴィク聚落變遷の姿を想定することは、一層の困難を伴ふであらう。しかし、例へばクェントヴィック、ドルスタット、シュレスヴィッヒ等の發掘をはじめ、英・獨兩國諸地方の地名學的・考古學的研究は、日を追つて進展しつゝある。ブルグ同様、多様なヴィクの在り方を具體的に想定し得る日も、決して遠くはあるまい。たゞいづれにしても、「ヴィク」は終始商業交易的性格に彩られた特定の場所乃至は聚落であり、防備を本領とするブルグと並んで、初期中世の生活様式の一面を暗示する有力な「都市の始源的形態」であつたことが發見された點に、吾々は多大のよろこびと注目を禁じ得ない。

- (16) S. Rietschel : Die Civitas Leipzig 1894, S. 101. 卷 2 及 F. Philipp : *Das Weichbild* に関する詳細なる論稿 (Hansische Geschichtsblätter, Jg. 1895, 所収) 等を轉く。
- (17) W. Vogel : *Wirk-Orte und Wikingen. Eine Studie zu den Anfängen des germanischen Stadtwesens.* HGBll. 60. Jg. 1935, S. 5—48.
- (21) H. Lindat : *Der Ursprung der ostdeutschen Wiken. Viertelj. f. Soz. u. Wgt. Bd. 29, 1936, S. 114—136.*
- (19) W. Vogel : a. a. O. S. 14 f. 參照。
- (20) これらの諸地が、初期中世北歐商業史上に占めた意義については、拙稿『中世北歐商業の展開』(『社會經濟史學』第七卷第六・七號所収)に一應觸れて置いた。就つて參看せられたる。尙ほまた、P. Kleider : *Nordwesteuropas Verkehr, Handel und Gewerbe im frühen Mittelalter.* Wien 1924, 2 冊に於て。
- (21) H. Lindat : a. a. O. S. 120—129 ; W. Vogel : a. a. O. S. 15—18 ; A. Bugge : *Art. "Wikingen"* in J. Hoops Real-

lexikon, Bd. IV, S. 330 f. 等参照。

(21) W. Vogel : a. a. O. S. 18—30, 35. 参照。

(22) C. Stephenson : The Anglo-Saxon Borough. Eng. Hist. Review, Vol. XLV, 1930, p. 177—207; H. Pirenne : Les villes du Moyen Age. Bruxelles 1927; S. Rietschel : Markt und Stadt in ihrem rechtlichen Verhältnis. Leipzig 1897; H. Ludat : a. a. O. S. 131—136; W. Vogel : a. a. O. S. 32—36. 等参照。

(23) 遠隔地商業の重要性については、F. Rörig : Mittelalterliche Weltwirtschaft. Jena 1933; W. Stein : Art. "Handel," Art. "Kaufmann" in J. Hoops Reallexikon. 等参照。

(24) ムンキンガー研究のすぐれた文献としては、古くは A. Bugge : Die Wikinger, Bilder aus der nordischen Vergangenheit. Halle a. S. 1906. 新しくは K. T. Strasser : Wikinger und Normannen. 2. Aufl. Hamburg 1934. 〇如き解説書がある。殊に後者は文化史的把握のすぐれたものである。

(25) 新説の詳細については、R. Much : Der Volksname Wikinger. Petermanns Mitteilungen, 74. Jg. 1928, S. 208. を見よ。

(26) W. Vogel : a. a. O. S. 42—48. 参照。

四

「ブルグ」及び「ヴィク」てふいはゞゲルマン古來の傳統を擔ふ二大先驅的形態の在り方を概觀した吾々は、いまや第三の形態として、かの羅馬化された西南獨逸にみる古き宗教的・文化的乃至は經濟的中核「キヴィタス」(Civitas)の構造を検討すべき立場に到達した。しかもキヴィタスについては、既に前掲リーチェルの詳細な古典的名著⁽²⁸⁾があり、

ゲルマン都市の先驅的諸形態

爾來公刊された個別的の研究の諸文献は、まさに汗牛充棟の盛況を示し、加ふるに、古代より中世へのいはゆる「文化連続性の問題」をめぐる論争は、近時特にキヴィタスの考古學的發掘に對して、多大の關心を寄せつゝあるが如くである。⁽²⁾この故に、かうした研鑽の諸動向をわきまへて、キヴィタス興亡の永き具體的推移をあとづけ、それが「中世都市」の完成にはたらきかけた諸影響の眞義を正當に評價することは、到底吾々の簡單に企て及ばざるところであり、こゝではわづかに、「キヴィタス」なる用語の變遷を介して問題所在の一端を指摘し、併せて吾々が最初に設定した「中世都市の起源」なる一般的課題への、極めて概括的な見透しを示すことによつて、ひとまづ本稿全體の結語に代へたいと思ふ。

さて、カロリング王朝時代西南獨逸に於ける都市的諸聚落の羅甸的表現を観るに、*civitas, urbs, oppidum, municipium, castellum, castrum, villa, vicus* 等々その種類極めて多く、のみならず同一聚落を指す名稱自體が多様の故に、吾々にとつては、一見その間何らの標準乃至は差違をも認め得ないが如くに考へられる。然るにあの劃期的著作をものしたリーチェルは、かうした夥しき事例を蒐集吟味した結果、このことを以つて、古き羅馬時代の正しき用法が、漸次興味ある轉化混淆を來しつゝある過程なりと考へ、そこから一種の嚴然たる規準を汲みとらうと努める。即ち彼は、(一) *civitas, urbs* と呼ばれると同時に、*castrum, castrum, vicus* 等とも唱へられる聚落と、(二) 通常 *civitas, urbs* 稀れには *oppidum* と稱されながら、斷じて *castellum* 以下の諸名稱もては呼ばれぬ聚落の一群とが存することを識別し、不思議にも後者が羅馬時代の傳統をうけつぐ本來のキヴィタス、換言せば自治を許された吾々のいはゆる「羅馬都市」(*Römerstädte*) なるに反し、前者は別個の事情に基因する新しきキヴィタスなる所以を、極めて個別

的具體的に例證する⁽²⁷⁾。かくしてあのライン、ドーナウに沿ふ周知の羅馬都市、Chur, Konstanz, Basel, Straßburg, Worms, Speier, Mainz, Köln, Trier, Metz, Tongres, Augsburg 及び特殊の舊き王宮都市 Regensburg の名が擧げられるのであるが、羅馬時代建設の都市すべてが「キヴィタス」として残つたと考へることは大きな誤謬である。例へば Bregenz, Kemjken の如きは、以前は羅馬の市法をもつキヴィタスでありながら、カロリング王朝時代の史料には、單に *Castrum*, *vicus* として表はれ來るに過ぎない⁽²⁸⁾。このことは、上掲第一群の新しき聚落への呼稱と共に、カロリング王朝時代に於ける「キヴィタス」の標準が、既に古羅馬へのつながりから、完全にはいへぬまでも、大部分脱却し、それに代る新しき別個の規準が擡頭しつゝある事實を物語つてゐる。別個の新規準とは何であるか。それはいふまでもなく、司教の所在地 (*Bischöfssitze*) たることにほかならない。尤も司教座をキヴィタスと呼ぶことは、メロヴィング王朝時代以降の漸次的な發展であるが、その當時は未だ羅馬都市との合致多く、たゞカロリング王朝時代に入つて、多數司教座の新設と共に、この轉化が愈々顯著になつたものと考へられる。例へば古き時代の *castellum* なりし *Utrecht*, *Bohnfatchuus* の傳道によつて漸く固定せる司教座となつた古きバイエルンの城砦的聚落 *Passau*, *Freising*, *Falzburg* 等々が、かうした「司教都市」(*Bischöfstadt*) キヴィタスの早き顯著な實例であらう⁽²⁹⁾。

羅馬都市キヴィタスは、大略敍上の如く、基督教を媒介とすることにより、いはゞ廢墟の上に、都市的繁榮への力づよき萌芽を育成したのであるが、九世紀以降にみるめざましき北歐布教の進展は、やがて新しき意味でのキヴィタスを生む結果となり、既に存した羅甸的用語の混淆は、更にゲルマン的表現と混淆して、つひに *castellum*, *castrum* も、*civitas*, *urbs*, *vicus* も、ひとしく「ブルグ」の一字をもつて理解翻譯されることとなつたと考へられる。*Civitas*

Augusta が Augsburg となり、castrum Bedonco が Bit-burg となる如く、こゝに羅馬的表現のゲルマン的なものへの移行、乃至は兩者の合流が行はれゆくわけである。時あたかも「都市的聚落の防備としてのブルグ」の發生をみつゝあつた前述の事實に想ひ合せて、Burg = Civitas = castellum 等と合流するこの邊の事情が肯かれるであらう。西南獨逸の都市形成に少からぬ影響をうけ、また東北獨逸のそれに影響を及ぼしたツェーリンガー家新建設の都市が、防備、司教座等の如何にかゝはりなく、何よりも先づ市場 (Markt) の故に、フライブルグと稱せられた最初の事例は、十二世紀がもつ都市發展史上最も興味ある變遷の一斑を示唆するものではなからうか。

以上吾々は、極めて粗雑ながら、キヴィタス變質の概要をあとづけた。従つてこゝに最後に、本稿の結語として、如上の敘述全體よりどれだけのこと立證され、またそれに即して、現在吾々が抱いてゐる見透しが如何なるものであるかを一言して置きたい。

吾々は都市のゲルマン的な先驅的形態として「ブルグ」と「ヴィク」を考へ、ブルグを防備的なもの、ヴィクを交易經濟的なものとして、その本質を規定し、他方、羅馬的な形態として「キヴィタス」をとりあげ、それが司教都市といふいはゞ宗教的・文化的中心に轉ずることによつて、積極的に北歐にはたつきかけることとなつた所以を述べた。然らばこれら三つの形態が、如何にして「中世都市」といふ一つのユニークな社會經濟的・文化的形成體となり得たのであらうか。想へば中世都市の共通せる諸特色は、既にいづれもこれら三形態の夫々分擔するところである。しかしこの三特色を渾然合流せしむる最大の契機となつたものは何であらうか。吾々はそれをリーチェルの³⁴⁾、そしてまた最近頃に活潑な論議が擲はされつゝあるあの市場的・商業的移住現象のすばらしき盛況に求めたい。しかし、これは

問題の解決ではない。問題は更に一步を進めて、何故十一・二世紀を轉機として、嘗に獨逸のみならず、英吉利其他西歐の全土に、いはゆる「商業の復活」が齎らされたのであらうか？ 探究されなければならない。即ちこの問題を、かのアンリ・ピレンヌがなした如くに、いはゞ外面的・綜合的に取扱ふのではなく、西歐社會の政治法制的變質の根源との關聯に於て、別言すれば、一は商人階級の實質的勢力の増大過程でふ側より、他は諸侯貴族の政策的配慮の變遷でふ觀點より、内面的・綜合的に分析把握する方法が必要なのである。

それは兎に角、かうした諸多の先驅的形態より、漸次大聚落に形成された諸都市は、やがて十二世紀以降、いはゆる「建設都市」(Gründungsstädte)と呼ぶ新興都市の一群を加へて、こゝに「中世都市」てふ大きな流れに合一する。ひとたび成立せる「中世都市」は、もはやその各々の成立過程に一應關係なく、全く別個の觀點から、即ちその經濟的機能に應じ、或ひは社會的構成に即して、新たな分類がほどこされ得ることとなる。そしてまさにこの點にこそ、逆にあの一見多種多様な諸都市が、「中世都市」として、綜合的に把握され得る一つの根據がひそんでゐるのではなからうか。いづれにしても、最も興味ある問題の解明を残して、ひとまづこの考察の筆を擱く次第である。

(27) S. Rietschel : Die Civitas auf deutschem Boden bis zum Ausgange der Karolingerzeit. Leipzig 1894.

(28) 拙稿『古ザルン文化連續性の問題』(『社會經濟史學』第九卷第七號所收)。尚ほ H. Aubin : Zum Übergang von der Römerzeit zum Mittelalter auf deutschem Boden. Siedlungsgeschichtliche Erörterungen über das Städteproblem. Historische Aufsätze, Festschrift zum 70. Geburtstag von A. Schulte. Düsseldorf 1927, S. 30—43 ; W. Reusch : Der Kölner Münzschatzfund vom Jahre 1909, zugleich ein Beitrag zur Geschichte des römischen Köln. Leipzig 1935.

ザルン都市の先驅的諸形態

一 橋論叢 第八卷 第二號

の如き一例を想ぐ。

- (36) S. Rietschel : Die Civitas. S. 43—50. 尙ほ引いたる對し W. Gerlach の所論、前掲 Die Entstehungszeit. S. 9f., 40—57. を比較せよ。
- (37) S. Rietschel : a. a. O. S. 37.
- (38) S. Rietschel : a. a. O. S. 34—37. 参照。
- (39) 前掲拙稿『中世北歐商業の展開』参照。
- (40) S. Rietschel : Markt und Stadt in ihrem rechtlichen Verhältnis. Leipzig 1897. 参照。
- (41) 英吉利のころには、そのノルマン・ロンクエームトによる政治的變革を重視する C. Stephenson の前掲 The Anglo-Saxon Borough. S. 207. の如き所論を參看せよ。
- (42) H. Pirenne : Les villes du Moyen Age. Bruxelles 1927. はじめ、彼の諸著をみよ。尙ほ拙稿『ノランク王国の商業交易—アンリ・ロレンヌの構想を中心に—』、『橋論叢』第五卷第五號所收)にも言及して置いた。

(昭和一六・七・一五)